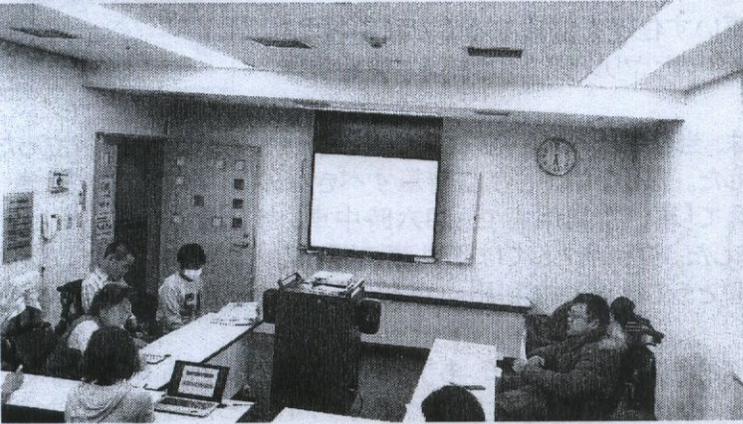


例会の報告

今回の例会は、NPO 法人ほっとスペース八王子の堀部施設長より、プロジェクターを使いながら、事業所の成り立ちから、移行後の様子まで、精神障害者がおかれてきた時代背景との関連性を交えながら、説明をして頂きました。

会場では、日々様々なカリキュラムが用意されている事に、一同驚かされながら、活発な意見交流が行われました。

また、同席した新人職員の森澤美和子氏からも、職場の様子や支援への情熱、今求めているものなど、とても興味深い話を伺うことができ、新鮮な空気感に話題が付きませんでした。(川出)



一年目は何とか大丈夫だったが一法内移行後のほっとスペース八王子

NPO 法人 ほっとスペース八王子 施設長 堀部 正

「ほっとスペース八王子」は都内唯一の当事者運営の共同作業所です。当事者運営の作業所は全国でも四か所しかありません。「ほっとスペース八王子」を設立したいきさつは、四大冤罪(えんざい)事件の「島田事件」で死刑囚とされた精神障がい者・赤堀政夫さんを救援したことから始まりました。第二第三の赤堀さんを社会から生み出さないために、私たちは地域で孤立している精神障がい者と一緒に「仲間作り」を中心に活動してきました。障害者福祉施策のグランドデザインが発表された時から「ほっとスペース八王子」は活動の在り方、また会を構成している仲間たちの状況からして法内移行することは困難だろうと考えました。

私たちは、このままだと「ほっとスペース八王子」はつぶれてしまうと危機感をもち、八王子市内を中心に都内まで「障害者自立支援法」反対の情宣活動を進めてきました。しかし、何度も話し合いを持たれた結果、生き残れないよりは何とか設立当時の考え方を生かす方向で法内移行するという選択をしました。

その選択の過程で「障害者自立支援法」反対運動をしていた仲間、職員の間にも亀裂が生じ、一日平均二〇名を超える通所者だったのが、一日平均7~8名の通所者にまで激減してしまいました。

選択した就労継続支援B型事業で運営するとすると、常勤職員3名プラス管理職員(サービス管理責任者を兼ねる)1名を確保する必要があります。ハローワークで求人をして最低賃金だと応募がなく、結局大赤字覚悟の賃金に増額して、やっと応募がありました。そもそも移行することに無理があったので、内部の混乱が続き、利用者は当初の予定していた半分近くまで減少しました。また、新常勤職員が総入れ替えすることになりました。

2013年度は途中から常勤職員1名プラス管理職員(サービス管理責任者を兼ねる)1名の体制で運営してきましたが、利用者が一日平均4~5名なので何とか人件費も含めて財政的に維持することが出来ました。しかし、今年度からは家賃補助金が減額になるので利用が増えることがなければ、赤字は覚悟しなければなりません。

新しい仲間も少しずつは増えていますが、引きこもりがちの仲間が多く、一年に一~二回の利用やあるいは週一回のスポーツプログラムだけ参加するという利用なので、とても激減緩和措置がなければこの状態での運営の維持は難しいと思います。

さらに、サービス管理責任者兼管理職員が高齢となっているので、若い人のような業務量に耐えられない状態です。

「障害者総合支援法」が制定されたからといって引きこもりの仲間、退院直後の自分の居場所が見当たらない仲間の拠り所としての「ほっとスペース八王子」の存在意味がなくなった訳ではありません。

また、精神障がい者の冤罪(えんざい)があり得なくなった訳でもありません。孤立した状況で孤独死、自死する仲間が減少したわけでもありません。ますます仲間作りの「ほっとスペース八王子」の存在意味は大きくなっていると思います。

「ほっとスペース八王子」は今後も八障連のみなさんと頑張りたいと思っています。



Hasshoren Tsushin

事務局通信

Vol.10

去る4月4日、中野上町に新規に建設された市営中野住宅の車いす住宅を見学して来ました。当日は急な話だったため、ヒューマンケアの光岡さん、ポリオの会の鈴木さんと杉浦、夢田の4名のみの参加でした。

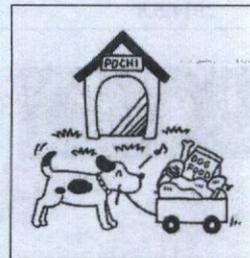
これは「市営中野住宅の老朽化に伴う建て替えに際して、車いす住宅を併設するので利用者になり得る当事者の意見も取り入れたい」との依頼が市からあり、昨年のヒヤリングに引き続き、実地見学を行ったものです。

地上5階の集合住宅の1階部分に併設された車いす住宅は、当然バリアフリー法に基づき設計されているので、目立った問題点は見受けられず、時代の変化をつくづく感じさせられました。そんな中で、今回特筆すべきなのは、事前の話では車いす利用者を想定して、全面フラットになっていたところを、あえて「車いす利用者でも四六時中車いすに乗っている人はむしろ少数派なので…」として、小上がりの畳の間を提案していました。担当者としては天井高の問題などで苦労したようですが床面から45センチ程嵩上げた3畳間が用意され、当事者にとっては様々な利用法が考えられ、生活に幅とゆとりが持たせられることが期待されます。

入居者募集は、先ず旧住宅の居住者が移転、残った部分に募集を掛けるそうで、もうしばらく時間が掛かるようです。

市役所に程近く、屋上部には共用部の電力を賄うソーラーシステムを設置して、窓はペアガラスになった最新型の住宅に誰が住むことになるのでしょうか？ 他人事ながら、ちょっと楽しみにも思います。

<文責/夢田>



連載コラム

『日々のなかから、、、』 vol.28

事務局長 杉浦 貢



『偽善』

前回のコラムのつづきです。

下記は乙武洋匡さんが過去に《24時間テレビの総合司会の仕事を断った》と公表した際、ネット上で発言したものです。

「『かわいそうな人たちが、こんなに頑張っている』と障害者を扱ってしまうことに違和感を覚えた」「障害者に対する扱いがあまりに一面的だとは思う」「僕が子どもの頃は、番組もいまより『貧困』に焦点を当てていたように思う。当時は僕も貯金箱の中身を持って、コンビニまで募金しに行った。だが、いつからかずいぶん番組のテイストが変わってきた。そこに登場する障害者は、あきらかに憐憫の情で見られている気がした。僕は、番組を見なくなった」

おおむね自分もその通りだと思います。私も、身体や心の障害を『人の同情を誘い、感動を呼ぶ物』として扱い、それで寄付を集め、視聴率を取ろうとする番組を作るような、日本のテレビ局全体の風潮には強い違和感があります。

寄付金が世の中の役に立っている事は評価します。番組自体の存在が、様々な難病や障害に対する世の中の理解を深めている事も、確かに認めています。

しかし、見ている人を感動させよう 涙を出させようとする演出が、あまりにしつこく、あざとい。と感じる時があります。たしかに、十分に人を感動させるだけの魅力を持った素晴らしい障害者も大勢います。でも、そういう人々は、我が身に降りかかる様々な苦難や哀しみを自力で克服し、やっとの思いで魂の平穩、心の幸福に辿り着いた人たちだと思うのです。

過去にたくさん、たくさん、のたうち回るような思いをして、もがき苦しんだからこそ、テレビの画面に映るその人の笑顔は美しいのだと思います。どうか、障害者の上っ面だけ眺めて涙するのはやめていただきたい。映像に出ない。言葉にしない普通の生活、当たり前前の日常の部分にこそ、その人の神髄があるのだと思います。昨今これだけ悪い奴が多いのに、障害者ばかりに美しいもの、感動的なものを求めるのは、もういい加減にして欲しい。というのが私の本音です。

安っぽい感動の涙とやらで、その人たちの人生を理解した気になって、貶めるべきではありません。現代人は誰もが美談に飢えています。癒やされたがっています。ある種、貪欲だと言ってもいいかもしれません。しかし、本物の感動というものは、画面の向こうにあるものではなく、誰かから押し付けられるものでもなく、毎日の生活の中で、自ら探して見つけるべきものなのではないかと、あのテレビに出た私は考えています。

今後のスケジュール

5月31日(土)	2014年度定期総会	13時半～16時	労政会館 第2会議室
6月19日(木)	例会	18時～20時	クリエイトホール